医学部 [一般・学士]～第２次試験～(1日目) 論文

試験時間	90分

注意事項　1　解答用紙に受験番号と氏名の記入を忘れないこと。
　　2　問題用紙、下書用紙は解答用紙とともに机上において退出すること。持ち帰ってはいけない。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

アップル社のスティーブ・ジョブズ氏が亡くなった日の翌日、目にした新聞記事である。彼が、かつてスタンフォード大学の卒業式での挨拶で「Stay hungry, stay foolish」という言葉をこれから社会に巣立っていく学生たちに餞(はなむけ)の言葉として送った。「stay hungry」という言葉は誰でも口にするが、「stay foolish」と言ったのを耳にしたことがないという趣旨の解説がついていた。

筆者は、以前からジョブズ氏と同じ思いを抱いていたので「これは、わが意を得たり」とちょっぴり嬉しくなった。頭の良い人は新薬創生の仕事には向いていないと思うことが間々ある。得られるだろう実験結果を先き読み予測するので、「そんな実験はしなくてもやる前から結果は見えている」と考えて、大抵は実施しない。それに反し、「やってみなければ判らない」と考える(愚かな人間)だけが、常識とは違った発見に遭遇する機会に恵まれることになる。実験実施前に立てた仮説が外れ、期待した結果が得られない場合がほとんどであるため頭の良い人に「また、無駄なことをしている」と言われることになる場合が多いのも確かである。しかしながら、稀に、常識とは違った作業仮説が的中することもあるし、ときには当初の研究目標の範囲を超えた意外な結果が得られることもある。このような予想外の結果に敏感に反応して新しいことを発想することから画期的発明が生まれるのであろう。

このような能力はセレンディピティーと呼ばれているが、新薬アクテムラの研究開発過程においてはそのような場面は思い出せない。ある程度予想をたてて駄目かも知れないけれども、やってみなければ判らないからやってみた。そうしたらうまくいった。このような幸運としか言えないようなことの連続であったと思う。利口な人ならやらないことを自分はやったわけで、「バカに徹したからできた」という思いが強い。

(中略)

誰も思いつかなかった「抗体を自己免疫疾患の治療に活用する」という「非常識」な着想が生んだ成功と自分では思っている。

本書を読んでいただいた学生諸氏や若手の研究者に判っていただきたいのは、一人の研究者が抱いた夢が現実のものになることもあるのだという事実である。二〇一二年のゴールデンウィークに刊行された『週刊ダイヤモンド』誌の特集「クスリ激変！　最新薬でここまで治る」で、筆者は「二万五〇〇〇分の一を掴んだ男」と紹介されたが、そのようなとてつもなく低い成功確率であったとしてもなお、である。筆者は自分の経験を通して、一度確信すれば、その信念を貫き、諦めないで粘り強く挑戦することの大切さを学んだ。本書のそこかしこ(随所)に鏤(ちりば)められている研究者の姿勢はどうあるべきかを汲み取っていただき、また、新薬の発明というワクワク胸が躍るような楽しくてやりがいのある仕事に携わりたいと感じていただくことができればこの上ない喜びである。

(出典　大杉義征著『新薬アクテムラの誕生』岩波科学ライブラリー)

問一　この文章に適当なタイトルを二十文字以内でつけなさい。

問二　傍線部の「これは、わが意を得たり」とちょっぴり嬉しくなった理由を四百字以内で説明しなさい。その際「foolish」という文言を必ず入れる事。

問三　この文章に述べられている事を、あなたのこれからの人生においてはどのように生かしてゆけばよいと考えるか、これまでの実際の体験を引き合いに出しつつ八百字以内で述べなさい。